# 閉校した校舎を地域再生のシンボルに―

NPO法人コブシ理事長
**蔭田 信雄さん**
かげた・のぶお（柏木）

平成18年、宮地小学校の校舎が宮地交流宿泊所『こぶし』として生まれ変わった。春蘭の里が展開するグリーンツーリズムの拠点として、地域再生のシンボルとして、『こぶし』は大きな役割を果たしている。

## ツーリズムの拠点が完成

「どうすれば校舎を残すことができるか」

平成14年3月に閉校した宮地小学校。その校下4集落の代表は、16年ごろから校舎の利活用について協議を始めていた。

当初、高齢者向けの介護施設が検討されていたが、予算や採算を理由に断念。建物所有者である町と協議を重ねた結果、簡易宿泊施設として整備することが決まった。

農林水産省の補助事業採択にあたっては、春蘭の里が展開するグリーンツーリズムの存在が大きかったという。

4集落は、施設を管理するためにNPO法人コブシを設立。安定した維持管理費用を確保するため全10部屋を「オーナー制」で運用することに決めた。

「オーナーには月々の料金を払ってもらい、部屋を管理してもらいます。宿泊が入ればマージンとして戻る仕組みです」と話すのはNPO法人コブシの蔭田信雄理事長（73）。蔭田さんは20年に、初代理事長の篠原正信さんから受け継いだ。「校舎がよみがえったのは地域がまとまり、思いが一つになったから。皆さんをまとめた篠原さんの功績は大きい」と振り返る。

『こぶし』の体育館でキリコの組み立てを体験する菊川小学校（金沢市）の児童。指導するのは、堂坂了副理事長。

## 古里に帰る場所ができた

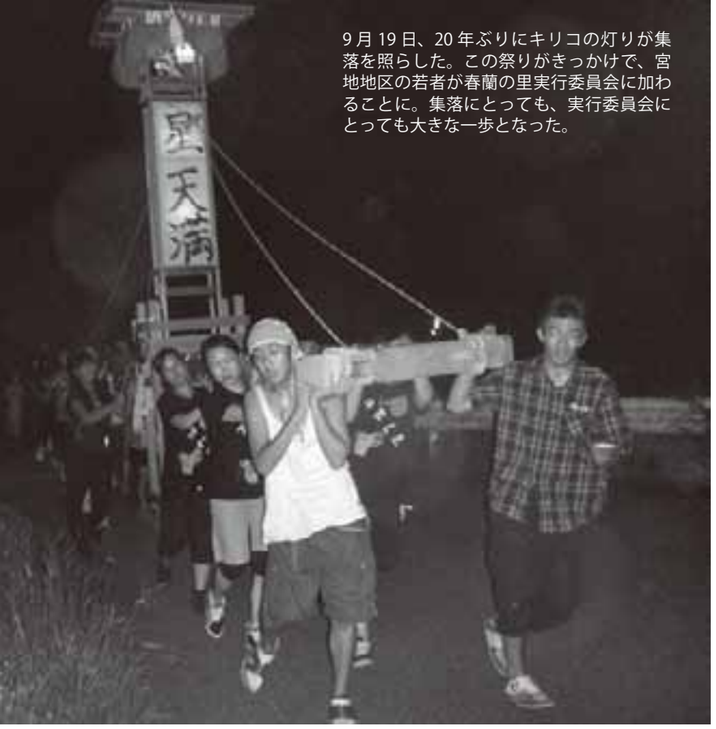
春蘭の里との相乗効果もあり『こぶし』の利用者は年々増加している。昨年の利用者は約2000人。本年度はさらに増える見込みだという。

「こんな何もない田舎に観光バスが3台も並びます。その様子を見て地域の人たちも喜んでいるようです」と蔭田さんは目を細める。

『こぶし』は、春蘭の里を訪れる人との交流だけではなく、地元の人や地元出身の人たちの交流の場にもなっている。

「今年は卒業生が3回、同窓会に使ってくれました。大阪から2、3カ月に一度宿泊に来て、ボランティアで花を植えたり草刈りをしてくれる卒業生もいます。古里に家がなくなった卒業生にとっては、帰る場所ができたと感じる人もいるのではないでしょうか」

交流の場であり、憩いの場でもある『こぶし』。人が集う地域再生のシンボルとして、春蘭の里構想の一翼を担っている。



9月19日、20年ぶりにキリコの灯りが集落を照らした。この祭りがきっかけで、宮地地区の若者が春蘭の里実行委員会に加わることに。集落にとっても、実行委員会にとっても大きな一歩となった。

## 20年ぶりのキリコ祭り

『こぶし』の体育館には、宮地地区の祭礼で使用されていたキリコや体験用のキリコなど6本が並んでいる。

このうちの1本が、9月19日の祭礼で御輿と共に集落を回った。宮地地区にとっては20年ぶりのキリコ祭り。キリコを担いだのは、春蘭の里にインターンシップ（就業体験）で訪れているホスピタリティツーリズム専門学校（東京都）の生徒だった。お世話になった地域に恩返しがしたいと祭りの日に14人が来町したという。

「キリコが立ち寄った家では、喜んで酒を振る舞って盛り上がっていました。数少ない地元の若い人も外に出てきて、うれしそうにキリコを担いでいたのが印象的でした」と振り返る蔭田さん。

「『こぶし』でのキリコ担ぎ体験が祭りの復活につながりました。反対もあるかもしれませんが、一生懸命やることで良いことが見えてくるんです」と決意を新たにしている。

春蘭の里実行委員会顧問
**瀬川 徳子さん**
せがわ・のりこ（金沢市）

## キリコ祭りの復活を見て、集落の再生を感じました。

わたしが春蘭の里に初めて訪れたのは8年前。皆さんに迎えてもらっていろいろ話を伺いました。このとき「何もない所がいい所なんだよなあ」という言葉に『地域の人たちがその良さに気づいている』と感動し、そのまま仲間に加えてもらいました。顧問という肩書きですが、地域が持続しながら活性化する姿を勉強させてもらっています。

春蘭の里は、千葉県で育ったわたしにとって古里になりました。今では、お姉ちゃんと会いたいという息子と一緒に春蘭の里に里帰りしています。ここで学んだこと、受けた感動を今後の仕事に生かすことが、皆さんへの恩返しだと思っています。

キリコの復活にも立ち会いました。笛の音、鐘の音を聞いた集落の人が笑顔で出てきていました。キリコは小さかったけれど、集落にとってすごく大きな一歩を踏み出したような感動に包まれました。

地域のやる気が専門家などいろいろな人を引きつけています。新しい農村のスタイルを作りだそうという春蘭の里の挑戦は、次の一歩に向けて走り出したのではないでしょうか。

# お世話になった皆さんの力になりたい。

春蘭の里は、観光分野を学ぶ専門学校のインターンシップ（就業体験）を受け入れ、交流を深めている。将来、旅行業界で働く人材とのつながりは大きな力。その中から、能登で働きたいという若者が生まれた。

春蘭の里実行委員会事務局
**汪 銘皓さん**
ワン・ミンハウ（台湾出身）

「海のイメージがあった能登半島。初めてときは、携帯電話も通じない山の中でびっくりしました」と話すワン・ミンハウさん（28）。観光業界で働く人材を育てる東京のホスピタリティツーリズム専門学校の留学生として、平成20年の夏休み1カ月を春蘭の里で過ごした。

19年からインターンシップを受け入れている春蘭の里。学生らは『こぶし』で共同生活を行いながら、春蘭の里の一員として活動する。

「地域の皆さんが本当に温かく迎えてくれて、日本語や日本の文化を学ぶことができました。研修仲間とも強いきずなができ、とても楽しかったですね」と研修期間を振り返る。

ワンさんは、翌年の研修も春蘭の里を希望。周りの学生も誘ったという。「春蘭の里の一番の良さは『人』です。ここに来てもらい、滞在してもらえば必ず分かってもらえます」。

『こぶし』を利用することで学生らの経済的負担は少ない。さらに学校側からも『春蘭の里から帰ってきた学生の表情が見違える』と言われるほどの好評だという。次代の観光業を担う若者との交流や学生らのアイデアを聞くことができるなど、受け入れる春蘭の里にもメリットが多い。

研修を受けた学生らは、団体客を受け入れているときに手伝いに来たり、宮地の祭りでキリコを担ぐなど、研修以外でも訪れるようになっている。春蘭の里のメンバーも、学園祭に参加するため東京に行ったりとお互いの交流を深めている。

## 都会にいる必要はない

就職を控えたワンさんは、能登で働くことを希望した。

「インターネットがあれば、情報や品物はどこでも手に入るので都会にいる必要はありません。それよりも自分がついて行きたいと思う人のいるところで働きたいと思いました」

卒業間際に事務員に空きができ、多田さんから春蘭の里で働かないかと誘われた。

「皆さんの力になりたいと思って働いています」

現在は、春蘭の里実行委員会事務局として、宿泊の受け入れや会員間の連絡、顧客とのメールのやりとりなどの仕事をこなしている。

「春蘭の里で研修をして観光業に就職した仲間たちがいます。彼らはまだ新人ですが、これからその効果が出てくるでしょう。ホスピタリティツーリズム専門学校の卒業生として、春蘭の里の一員として、この関係がこれからも続いてほしいと思っています」

台湾と東京で観光業を学んだワンさん。その知識と経験は、春蘭の里のこれからを支える。

**【PROFILE】**
**ワン・ミンハウ**
1982年台湾生まれ。国立のホスピタリティカレッジを卒業し、1年間の兵役を経て、日本に留学。台湾と日本の添乗員資格を持つ。2010年4月から春蘭の里実行委員会事務局に就職。

**ホスピタリティツーリズム専門学校**
観光・サービス業団体から推薦・支援される専門学校。旅行科やホテル科など7科を設置し、留学生制度も備える。これまでに約32,000人が卒業し、各業界で活躍する人材を輩出している。

# 『里山イニシアティブ』

「里山では、人が手を加えることで生態系を維持することができる―」。10月に名古屋で開催された生物多様性の国際会議で、日本政府は自然との共生モデルとして「里山イニシアティブ」を提唱。「SATOYAMA」が世界へアピールされた。里山を保全し、その恵みを生かす春蘭の里の活動は「里山イニシアティブ」そのものではないだろうか。

春蘭の里が整備するキノコ山の一画

# 春蘭が自生する持続可能な里山を目指す。

里山の恵みといえばキノコと山菜。春蘭の里は現在、32ヘクタールの里山をキノコ山として整備している。本年度からは林野庁の事業でキノコの本格的な調査も始まった。実行委員会会長でキノコ山調査を任される中本安昭さんに、春蘭の里が目指す里山の姿を聞いた。

シモオコシ（11月12日撮影）

## 春蘭の咲く里山を

「里山はほったらかしでも、人の手が入りすぎてもダメ。適度に手入れされることがキノコにとって良い環境なのです」

中本安昭さん（73）は、春蘭の里の取り組みの一つである里山保全の中心人物だ。「子どものころから一人で山に入ってキノコを採っていました」と話す中本さん。中学校までは岐阜県奥飛騨地方で過ごした。35年前、病気療養のために奥さんの古里である鮭尾に。そのままここで暮らすことを決めた。「こっちに来てから病院に行ってません。水と空気が良いからでしょうか」とほほ笑む。

春蘭の里実行委員会の最年長で会長を務める。「春蘭の里」のネーミングは中本さんの案だという。「良い環境の里山には春蘭が自生します。春蘭は里山のバロメーターなのです」。

## 本格的キノコ調査を開始

キノコや山菜も地域の大切な資源の一つとして考え、里山の保全活動を続けてきた春蘭の里。本年度から林野庁の事業を受けて、キノコ博士・赤石大輔氏（NPO法人能登半島おらっちゃの里山里海研究員）のもと調査研究が実施されている。

「20メートル四方の10区画を選んで整備をし、二日に一回のペースで記録係と一緒に調査しています。調査では、いつ、どこで、どのようなキノコが出るかをGPS機能付きのカメラで撮影し、データとして残す作業をしています。調査区域では約100種類のキノコがあり、食用は約1割というところです」

本格的なキノコ調査を行っている場所は多くない。調査を継続してキノコの写真とデータがそろえば、体験でのアピールや農家民宿での計画的な提供など活用の幅は大きく広がる。

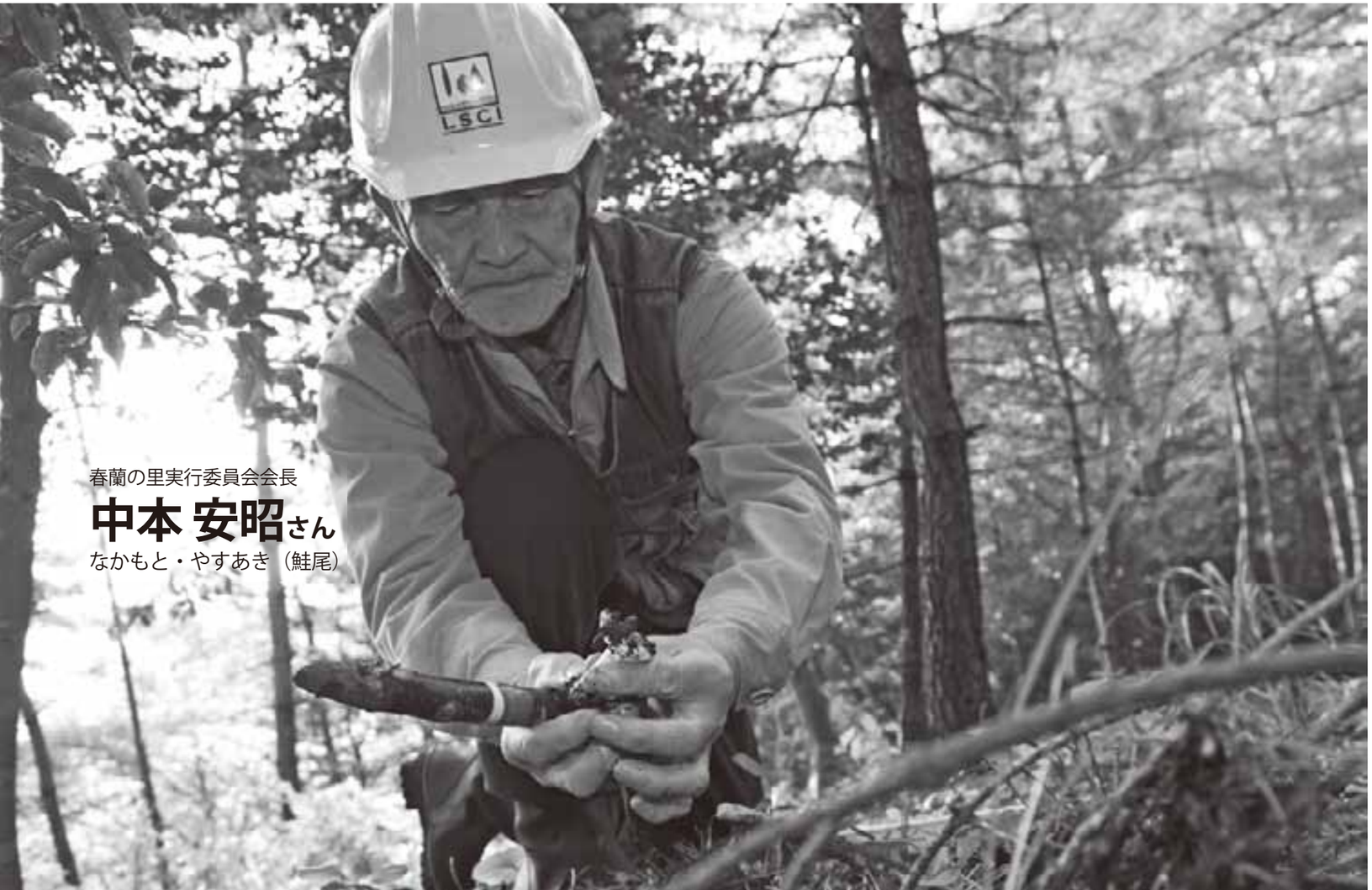
「毒キノコも必ず記録しています。キノコ料理を提供する民宿にとって、一番重要なことはキノコ中毒を出さないこと。猛毒もあれば一部の人にだけ毒になるものもあります。わたしも民宿ももっと勉強して、キノコ狩り体験をする人に教えられるようにならなければいけません」

## 持続可能な里山に

中本さんは、里山管理の新しい形を作りたいと考えている。

「キノコを見つけると小さいものまで採ってしまう人が多いのは、ほかの人に採られたくないと思うからです。みんなで恵みを共有すれば、これはまだ採らないとか、残そうということができます。これが持続可能な里山の管理なのです。里山にはキノコや山菜以外にも食べられるものがたくさんあります。計画的に植樹をして四季の変化を楽しめる森にすれば森林療法も可能でしょう。やりたいこと、可能性はたくさんあります」

子どものころから里山と共に生きてきた中本さん。里山への強い思いと豊富な知識は、春蘭の里の大きな力となっている。



春蘭の里実行委員会会長
**中本 安昭さん**
なかもと・やすあき（鮭尾）

## 先駆的里山保全地区・里山里海ミュージアム
# 県内先進地としての支援

石川県では、住民が意欲的に里山の保全活動をしている地域を応援しようと「先駆的里山保全地区」として春蘭の里を含めた7カ所を選定しました。

本年度は、里山を一つの博物館として見立て、暮らしや生業、歴史・文化などの地域資源を発信する「里山里海ミュージアムプロジェクト」を珠洲市北部地区と春蘭の里で実施しています。

生物多様性の向上のためには、里山の保全が非常に重要ですが、一方で過疎化や高齢化の問題があります。ミュージアムでは、地域の人が「里山学芸員」として里山の魅力を紹介し、訪れた人が一緒に保全活動に参加する仕組みづくりを検討します。

農家民宿やツーリズムで里山を利用保全することが、交流人口の増加や新しい産業の創出など地域の活性化につながればと思っています。

県では、里山を利用しながら保全する「利用保全」をキーワードにしています。春蘭の里のキノコ山の整備が、まさに里山の利用保全です。

キノコ山を整備することで食材として使えるキノコや山菜が増える。そして里山は生物多様性の豊かだった昔の姿を取り戻すのです。

県としては、ほかの地域が取り入れられるような成功事例・モデル地域を作りたいと考えています。春蘭の里は、里山保全活動やグリーン・ツーリズムの県内先進地です。今後もさまざまな角度から春蘭の里を応援していきたいと思っています。

石川県自然保護課
**栂（とが） 典雅（のりまさ）さん**

# 里山の恵みを高齢者の生きがいに―

のと愛菜市場（あいさいいちば）は平成13年、能登空港開港前に何か地域おこしができないかと地元の有志26人が始めました。

今までは、作りすぎた野菜や採りすぎた山菜・キノコなどは人にあげるか捨てるだけでしたが、直売所があれば少ないながらもお金になります。出荷する高齢者にとって、野菜作りやキノコ採りは、生きがいになっているのではないでしょうか。

特にキノコは野菜に比べて値段も高い。普段は足が痛いと言っている人も、キノコの時期には里山を走り回っています。

現在は土・日と祝日に輪番制で二人が店番をしています。お客さんと話をしながら、食材の食べ方を教えたり、教えられたりすることも楽しんでいるようです。売り上げの計算もあり、「楽しみながらボケ防止につながることが一番だ」といつも会員に話しています。

直売所でおはぎやかきもち、漬け物なども販売したいと考えましたが、加工場と各種の許可が必要でした。町政懇談会で町にお願いしたところ、加工場を整備してもらうことになり「のと夢づくり」を設立しました。

「とにかく10年頑張ろう」と声を掛け合って続けてきて、10年が立ちました。メンバーのほとんどは70歳以上、80歳代の人もいます。高齢化は深刻ですが、それぞれ生きがいを持って自分の得意分野で頑張っています。地域の高齢者が元気に暮らすことができるのは、里山の恵みがあるからだと思っています。

のと愛菜市場 会長
農事組合法人のと夢づくり 理事
**藤田 三喜男さん**
ふじた・みきお（柏木）

**【のと夢づくり】写真上**

平成17年、地元の要望を受けて町が建設した農産物加工施設を、農事組合法人のと夢づくりが指定管理者として管理・運営する。主な加工品は山菜や野菜の漬け物、梅干し、赤飯、みそなど。

週に一度、施設に集まって漬け込んである野菜を真空パックに詰めて商品化している。のと愛菜市場や「なごみ」、ＪＡおおぞらの青空市場（穴水町）などに出荷。

**【のと愛菜市場】写真下**

宮地・鮭尾・太田原・柏木の住民20数人が共同で運営する農産物直売所。5月から11月までの土・日・祝日、午前9時から午後6時まで営業。

倉庫を改造した店内には、会員らが育てた米や野菜のほか、里山の恵みである山菜・キノコ・ジネンジョ、のと夢づくりで加工した梅干しや漬け物など、この地域で生産されたものを低価格で販売している。

キノコ山を散策する視察団

## 生物多様性と里山

生物多様性条約の締約国が2年ごとに集まり国際的な枠組みを決める会議が10月11日から約3週間、名古屋市で開催された。

世界179カ国から約1万3000人が参加したCOP10（生物多様性条約第10回締約国会議）。そのエクスカーション（視察）が石川県でも実施され、10月23日から二日間、18カ国52人の視察団が石川県内の生物多様性に対する取り組みを視察した。

# COP10（コップテン）（生物多様性条約第10回締約国会議）エクスカーション・in 春蘭の里

今回の視察では、生物多様性の観点からも世界が注目する「SATOYAMA」の代表として、春蘭の里が紹介された。

## 温かいもてなしに高い評価

春蘭の里では、長龍寺でセミナーを行ったあと昼食。午後からはキノコ山の視察とこぶしの見学が行われた。同行した石川県自然保護課の栂典雅（とがのりまさ）さんは、キノコ山の視察について「日本は世界的に見てもキノコの種類が多いが、これは木の種類も多いということ。キノコは生物多様性においても重要な役割を持っている」と話す。参加者は、春蘭の里のメンバーに質問しながら秋の里山を散策し、自然と共生する日本の農村の姿に感心しているようだった。

視察終了後に県が行ったアンケートでは、47人中34人が一番良かった視察先として春蘭の里をあげた。「素朴だが心のこもったもてなし（ホスピタリティ）」への評価が高く、栂さんは「結果は良かった。世界の人に春蘭の里を知ってもらった意義は決して小さくない」と成功裏に終わった視察を振り返った。

清龍坊での昼食を準備する地域の皆さん。春蘭の里で収穫された山菜やキノコ料理を輪島塗の器に盛りつける。漬け物、酢の物、煮物、天ぷらなど8品を用意。地元の食材を使った料理の評価も高かったという。

# 春蘭の里の夢、そして新たな挑戦

## 自分たちがやってみせることで地域全体をプラス思考に―。

春蘭の里は、限界集落ではありません。なぜなら、この地域には元気な高齢者が多いから。元気な高齢者が春蘭の里の地域資源なのです。

昔からの生活文化を知っている。地域の伝説や伝承を語ることができる。野菜作りの名人。キノコ採りの名人。能登の田舎で培われた高齢者の知恵こそが、どこにもないこの地域だけの財産だと思っています。

都会の人が驚く能登の観光資源は、黒い屋根瓦と白い壁の家がある景観です。この価値を分かってる人は多くありませんが、失われてしまう前に能登半島全体で対策を講じるべきだと思っています。

田舎がこれから生き残っていくためには、都会と田舎をマッチングさせるしかありません。都会の人を農家民宿で呼び込むことが、能登の一次産業の発展につながるし、一番の近道だと考えています。

農家民宿はこの地域の本物を提供することにこだわっています。COP10の視察でも高い評価を得られたことで、新しく入ったメンバーも自信を持ち始めました。

これまでの成果を見ても、農家民宿という選択は間違いではなかったと確信しています。

あとは、息子たちが帰ってこれるように月40万円の売り上げを確保することです。都会の人で民宿をやりたい人でもかまいません。この地域に若者が戻ってくる基礎を作ることが、集落の存続につながるのです。

現在30軒の農家民宿が、ほかの地域にも広がってほしいと考えています。当目や中斉、神野地区などは宮地から車で10分ほどで、立派な家がたくさんあります。この地域であと10軒から15軒くらい増やせれば面白くなるのではないでしょうか。

さらにグリーンツーリズムの海版も可能です。それには恋路の民宿群が一番適していると思いますし、能登町のグリーンツーリズム協議会で話をしていこうと思っています。

地域全体をまとめるには、まず自分たちがやってみせて結果を残すことが重要です。成功事例を示すことで、今度はこれをやれば面白いんじゃないか。次はあれをやれば楽しいんじゃないかと地域全体がプラス思考になります。ほかの地域のモデルとして、一つの方向性を示すこともできます。みんなが楽しみながら地域おこしに参加するようになるのです。

マイナス意見や批判もありますが、わたしたちは言葉でつぶされたくはありません。農村再生を信じて、前向きに、プラス思考で進んでいきます。

のと愛菜市場でお客さんを迎える山本さがのさん（柏木・写真左）と堂谷節子さん（宮地）。

**【取材を終えて】**

春蘭の里の皆さんは輝いて見える。まだまだメンバーのボランティア精神に支えられている部分もあるが、やっている本人たちが楽しんでいるから、自然と笑顔が出るのだ。

能登半島のどこにでもあるような中山間地の集落。決して特別な場所ではない。よそ者を受け入れること、地域を引っ張るリーダーの存在が春蘭の里を地域づくりの先進地にまで成長させた。

仕事がない。遊ぶ場所がない。能登で『ない』ことを探すのは簡単だ。でも本当に『何もない』のだろうか。都会に『ない』ものが、実はたくさん『ある』のではないだろうか。

マイナス思考ではなくプラス思考の頭で、ちょっとだけ視点を変えて自分たちの地域を見てみる。そこにはきっと宝の原石が転がっている。どうやって原石を磨くのか。春蘭の里の思いと歩みに、そのヒントがあるのかもしれない。

足元をしっかり見つめ直してから、上を向いて歩こう。笑顔あふれる地域のために―。（終）